

谷茶村沖で大和船(薩摩船)が破船した事に伴って、長和が支援をしたことに対して首里王府より褒賞されており、その書状が記されています。

これによると、破船したのは柏原盛右衛門の大吉丸で、恩納間切検者の亀谷筑登之親雲上長和が下役たちを引き連れて現場へ駆け付け、薩摩の「御用品」や御蔵方の公用物、人々の浮荷を沖から取り揚げるなどの始末を昼夜通じて行い、橋船や「すの板」を紛失した際も村中で話し合い、万端の管理に手抜かりの無いよう取り計らって、皆で丁寧に対応したとあります。そして長和の勤功を取り立てるよう、前任の薩摩在番奉行・町田平と唐物方の役人たち、首里王府の取納奉行からも連絡があり、三司官の名で書状が書かれました。さらに同家譜には、10月付薩摩家老から「晒吉疋」<sup>さしきつびき</sup>を与える書状が収録されており、長和の手厚い対応が評価されていたことがわかります。なお、恩納間切沖での漂着や破船等の記事は他の家譜にも散見され、こうした海難事故や事件は度々起きていました。緊急の対応でしたが、間切を監督する立場だった検者だからこそ出来た現地での対応なのかも知れません。

まとめにかえて

最後に、私の問題関心の一つを述べます。

那覇士の『容姓家譜 大宗』山田家(那覇市歴史博物館所蔵複製本)では十一世義篤が道光二十(1840)年に、『容姓家譜 支流』山田家(那覇市歴史博物館所蔵複製本)では九世義教が嘉慶十(1805)年にそれぞれ恩納間切検者になっていることが確認できます。いずれも家譜の記述上では恩納間切の検者となっていることのみがわかるわけですが、首里王府から現地に派遣される役人であったことから、検者在任中に恩納間切の土地勘や人脈を得ただろうと考えられます。そこで、喜瀬武原の「入植記念碑」(2020年、喜瀬武原区建立)に

記載されている方々と、家譜で確認できる検者の経歴から屋取集落形成と関係があるかどうかという問題が見出されます。それには家譜の容氏と屋取した山田(容氏)との関係を確認することが課題であり、また入植した他家との関係はどうだったかという方向からも考える必要があるため、問題解決は簡単ではありません。しかしながら、恩納村における屋取集落の形成を考える上でも、検者の存在は興味深いものがあるのではないのでしょうか。

そしてもう一つ、検者の他に18世紀後半から19世紀初頭にかけて設置され、間切の指導・監督にあたった下知役の活動についても可能な限り「歴史編」で明らかにしたいと思います。

近世琉球の恩納間切の姿を見つめていくべく、家譜をめくりながら関連記事を探る作業はまだまだ続きます。



喜瀬武原の「入植記念碑」

#### 【参考文献】

- ・比嘉春潮・崎浜秀明編訳『沖縄の犯科帳』東洋文庫41 (平凡社・1965年)
- ・渡口真清著『近世の琉球』(法政大学出版局・1975年)
- ・金城正篤著『琉球処分論』(沖縄タイムス社・1978年)
- ・田名真之著『沖縄近世史の諸相』(ひるぎ社・1992年)
- ・川島淳「歴史資料を集めて読み解くこと」恩納間切番所の光景を中心に「広報おんな」(恩納村・2019年9月)